まえがき

なぜ，いま，フェミニスト経済学か

本書は，フェミニズムの視点から経済学をとらえたフェミニスト経済学の教科書である。フェミニズムの視点とは，経済社会におけるジェンダーの作用を追究することによって，女性に限らず，男性，子ども，高齢者などの万人を，差別や抑圧から解放し，1人ひとりの権利を保障することで，万人のウェルビーイング（well-being）の向上をめざすものである。これは，本書の副題「経済社会をジェンダーでとらえる」が意味するところである。ウェルビーイングとは，日本語で「福祉」や「幸福」とも訳されるが，本書では「暮らしぶりの良さ」と定義する。

2020年，私たちは新型コロナウイルス感染症のパンデミックに遭遇した。その影響は，すでにあったジェンダー，階層，人種，グローバルノースとサウスによる不平等・格差を深め，人をケアするための政治も経済も脆弱であることを浮き彫りにした。さらに，22年に勃発したウクライナ戦争は大規模な人命と環境の破壊を引き起こし，国際市場における食糧・エネルギー価格の高騰と，アフリカや中東をはじめとする途上国での食糧不足を招いた。また，すでに気候変動にともなう自然災害の影響は甚大なものとなっており，世界中で，多くの命が犠牲になっている。このような世界が抱える問題をどのようにフェミニズムの視点から経済学の事象として分析できるだろうか。

フェミニスト経済学は，人間のニーズ充足のための生産・提供・調達・準備・保管といった「プロヴィジョニング」のありようを分析する学問である。人間のニーズを満たすためのプロヴィジョニングを考察しようとすれば，主流派経済学がおもな分析対象としてきた市場経済の分析だけでは十分ではない。人間のニーズの充足は，世帯の中でも行われるし，国家による福祉サービスの提供も人間のニーズを満たすプロヴィジョニングである。地域コミュニティにおけるコモンズ（共有資源）の保全と利用や自家消費用の食料生産もプロヴィジョニングである。フェミニスト経済学は，世帯，国家，地域コミュニティ，市場において，どのように人間のニーズが満たされるのか，受け手と与え手のジェンダーの偏り，その提供に必要とされる労働は有償なのか無償なのかなど

に着目して分析する。その際，人間は他者からケアを与えられなければ生命を保持することができない，他者に「依存した」状態で生まれることに目を向ける。私たちが生きる社会は他者からのケアを絶対的に必要としていることを前提に経済社会のありようを考えることが，フェミニスト経済学の特徴といえる。

また，フェミニスト経済学は，セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖にかかわる健康と権利）も経済のテーマととらえる。それは，人間のウェルビーイングと再生産にとって重要な要素だからである。性をめぐる関係性や人間と環境との相互作用のなかで，人間がどのように生まれ，そしてその健康がどのように維持されるかを研究することも経済学の対象となる。つまりフェミニスト経済学は，人間の脆弱性を前提に，人間のニーズを満たす財やサービスのプロヴィジョニングを分析することで，ケアを中心にすえた経済学を構想しようとしているのである。

IAFFE と JAFFE におけるフェミニスト経済学の展開

本書は，1990 年代からフェミニスト経済学の発展に大きく貢献してきた国際フェミニスト経済学会（International Association for Feminist Economics: IAFFE）および日本フェミニスト経済学会（Japan Association for Feminist Economics: JAFFE）の研究蓄積に大きな刺激を受けて執筆されている。IAFFE は 92 年に設立され，現在 64 カ国に会員を擁している。会員は，グローバルノースとサウスの研究者，実務家，アクティビストなど，多様なバックグラウンドをもつ者から構成される。IAFFE は 95 年に，学術雑誌 *Feminist Economics* の発行を開始し，97 年には，国連経済社会理事会との協議資格を獲得し，以降，学術研究のみならず積極的に政策提言も行っている。92 年以降，IAFFE は，北米，ヨーロッパ，それ以外（アフリカ，南米，アジア等）と持ち回りで年次大会を開催しており，こうしたことも世界中でフェミニスト経済学が広まっているがゆえの試みである。

JAFFE は，IAFFE の活動に触発された日本の研究者たちによって 2004 年に「フェミニスト経済学日本フォーラム」として設立され，2008 年には研究活動の促進，国内外の交流の強化をめざして「日本フェミニスト経済学会」に改組された。2016 年より学術雑誌『経済社会とジェンダー』を発行し，近年の研究大会では，家事労働，公的ケアとしての相談支援業務，東南アジアの経

済成長の再検討，コロナ災害と女性，フェミニスト経済学からみた政治・権力など日本の課題に直結するテーマに取り組んでいる。

本書の構成と特徴

第Ⅰ部の「理論と方法」では，フェミニスト経済学の分析視角として，合理的経済人仮説，アンペイドワーク，世帯内の意思決定と資源配分を検討し，分析ツールとして，生活時間とジェンダー統計を提示する。第Ⅱ部の「領域と可能性」では，労働市場，マクロ経済，ジェンダー予算，福祉国家，金融，資本・労働力移動，貿易自由化，開発，環境・災害という各分野におけるフェミニスト経済学の問題意識と分析視点を提示する。

各章の構成も可能なかぎり統一した。第1章をのぞくすべての章を3節構成とし，第1節では，各分野においてジェンダーによって発生している状況や問題がいかに異なるのかについて述べ，第2節で既存の経済学がどのようにその領域や問題を扱ってきたかを簡潔に押さえ，第3節でフェミニスト経済学による分析方法や政策提案を紹介した。各章にColumnをおき，本文の理解を助ける具体的な事例を盛り込んだ。また，巻末には，読書案内を掲載した。読書案内には執筆者全員で，読者が入手可能な日本語で読める良書や小説，エッセイ，映画，ドキュメンタリーを選んだ。こうした書籍などを通じて広くて深いフェミニズムと経済学の世界への関心を広げてほしい。

本書は，いまの経済社会とジェンダー秩序に居心地の悪さや疑問を感じている人や，経済学の発展に関心のあるすべての人に向けて書かれている。また，大学の授業やゼミで使用することを想定し章を構成したが，経済学を学んだことのない読者でもポイントをつかんでもらえるように心がけて執筆した。

もはや人間のウェルビーイングも地球環境も危機に瀕している。フェミニスト経済学は，人間と地球環境の両方にとって持続可能な社会を構築するための分析枠組みを提示するだけでなく，行動のための学問でもある。さあ，フェミニスト経済学の扉を開いてみよう。

編　　者

執筆者紹介

50 音順。＊は編者

李　素 軒（い　そほん）　第 10 章

帝京大学経済学部講師。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了，博士（経済学）

〈主要著作〉「重層的信用ネットワークとしてのグローバル金融システムとデリバティブ」『季刊経済理論』第 54 巻第 1 号，2017 年；「資本自由化以降の韓国における二つの外貨流動性危機の比較分析」『アジア研究』第 65 巻第 1 号，2019 年

市井　礼奈（いちい　れな）　第 1 章，第 8 章

ロイヤルメルボルン工科大学大学院講師，UNDP Sustainable Finance Expert. Ph.D.（Economics）, University of South Australia, Australia.

〈主要著作〉 *Performance Indicators for Gender Responsive Budgeting*, Lambert Academic Publishing, 2011; “Gender-Responsive Budgeting in South Korea,” B. Akanji and F. Soetan eds., *Gender-Responsive Budgeting in Practice*, Rowman & Littlefield, 2021.

＊金 井　郁（かない　かおる）　第 1 章，第 3 章，第 5 章，第 6 章，第 9 章

埼玉大学人文社会科学研究科教授。東京大学大学院新領域創成科学研究科博士後期課程単位取得退学，博士（国際協力学）

〈主要著作〉「人事制度改革と雇用管理区分の統合」『社会政策』第 13 巻第 2 号，2021 年；「生存をめぐる保障の投資化」『現代思想』第 51 巻第 2 号，2023 年

斎藤　悦子（さいとう　えつこ）　第 4 章

お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所教授。昭和女子大学大学院生活機構研究科博士後期課程単位取得満期退学，博士（学術）

〈主要著作〉『CSR とヒューマン・ライツ』白桃書房，2009 年；『ジェンダーで学ぶ生活経済論（第 3 版）』（共編著）ミネルヴァ書房，2021 年

杉橋やよい（すぎはし　やよい）　第5章

専修大学経済学部教授。Ph.D.（Census and Survey Research), The University of Manchester, UK.

〈主要著作〉「ジェンダーと統計」経済統計学会『統計学』第90号，2006年；「男女間賃金格差の要因分解手法の意義と内在的限界」『経済志林』第76巻第4号，2009年

*長田　華子（ながた　はなこ）　第1章，第11章，第12章

茨城大学人文社会科学部准教授。お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科修了，博士（社会科学）

〈主要著作〉『バングラデシュの工業化とジェンダー』御茶の水書房，2014年；『990円のジーンズがつくられるのはなぜ？』合同出版，2016年

藤原　千沙（ふじわら　ちさ）　第1章，第2章，第3章，第4章，第9章

法政大学大原社会問題研究所教授。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学，博士（経済学）

〈主要著作〉『労働再審③ 女性と労働』（共編著）大月書店，2011年；『「子どもの貧困」を問いなおす』（共著）法律文化社，2017年

*古沢希代子（ふるさわ　きよこ）　第1章，第13章，第14章

東京女子大学現代教養学部教授。大阪市立大学大学院経済学研究科博士後期課程修了，修士（経済学）

〈主要著作〉“Land, State and Community Reconstruction,”（共著）S. Takeuchi ed., *Confronting Land and Property Problems for Peace*, Routledge, 2014；「東ティモールにおける水利システム改革とジェンダー」『大阪経大論集』第68巻第5号，2018年

山本由美子（やまもと　ゆみこ）　第1章，第7章，第13章

岡山大学グローバル・ディスカバリー・プログラム／大学院社会文化科学研究科准教授。Ph.D.（Economics), The University of Utah, USA.

〈主要著作〉 *Trade Winds of Change*, UNDP, 2016; “Recognizing, Reducing and Redistributing Unpaid Care and Domestic Work for Inclusive Growth and Sustainable Development,” ADB and UN Women eds., *Gender Equality and the Sustainable Development Goals in Asia and the Pacific*, ADB and UN Women, 2018.

目　次

まえがき　i
執筆者紹介　iv

第Ⅰ部　理論と方法

第1章　フェミニスト経済学への招待――2
1　フェミニスト経済学とは何か……2
1.1　フェミニスト経済学とは　2
1.2　合理的経済人仮説批判　5
1.3　フェミニスト経済学の人間像　6
2　フェミニスト経済学の分析視点……8
2.1　人間のニーズとプロヴィジョニング　8
2.2　ソーシャル・プロヴィジョニング・アプローチ　9
2.3　ケイパビリティとエージェンシー　11
――個人・集団・構造の関係をみる
3　学際性と多様性……14
3.1　フェミニスト経済学の学際性　14
3.2　グローバルサウスからの問いかけ　17
3.3　方法論と分析レベルの多様性　19
4　フェミニスト経済学の研究課題――本書の構成……21
Column①　家政学とフェミニスト経済学　17

第2章　アンペイドワーク――人間のニーズとケア――25
1　フェミニスト経済学の核心……25
1.1　人間のニーズの充足　25
1.2　人間のニーズの充足とアンペイドワーク　27
1.3　アンペイドワークとペイドワーク　28
2　アンペイドワークの3つのR――Recognize/Reduce/Redistribution……29

2.1　認識して測定する（Recognize）　29
2.2　インフラを整え削減する（Reduce）　31
2.3　社会のなかで再配分する（Redistribution）　35
3　アンペイドワークとケアエコノミー……36
3.1　ケアを中心にすえた経済　36
3.2　5つのRとディーセントワーク　38
3.3　ケアエコノミーの課題　40
Column ②　アンペイドワークの時間量を決める要因　33

第3章　世帯――世帯内意思決定と資源配分――44
1　世帯と個人……44
1.1　世帯単位の問題　44
1.2　労働供給主体としての世帯とジェンダー化された個人　47
1.3　世帯内ジェンダー不平等　49
2　経済学は世帯をどのようにとらえてきたか……51
2.1　新古典派経済学における「新家庭経済学」　51
――ユニタリーモデル
2.2　世帯員間の交渉に基づく意思決定――コレクティブモデル　53
2.3　世帯の中を「効用」で考えることへの疑問　54
3　フェミニスト経済学と世帯……55
3.1　フェミニスト経済学は世帯をどのようにとらえるか　55
3.2　世帯内の意思決定と家計管理　56
3.3　世帯内の対立・交渉と協力・協調　58
――規範という社会的文脈と女性の選択
Column ③　世帯内意思決定と夫婦の姓　59

第4章　生活時間――資源としての時間――62
1　時間からみえる世界の広がり……62
1.1　私たちは何に時間を費やしているのか　62
1.2　時間からみる日本の経済社会の特徴　63
1.3　測定単位としての生活時間の重要性――4大生活時間　67
2　経済学における時間の取り扱い……71
2.1　労働と余暇の二分法　71
2.2　労働価値説　72
2.3　フェミニスト経済学にとっての時間　73

3　フェミニスト経済学の時間アプローチと政策論……74
3.1　生活時間を把握する手法――時間研究・時間調査　74
3.2　時間研究の課題　76
3.3　生活時間と社会政策　78
Column ④　サモアにおける生活時間調査　75

第 5 章　ジェンダー統計――社会を把握するツール――――――82
1　ジェンダー統計とは何か……82
1.1　統計から社会を把握する　82
1.2　男女別の統計からみえるもの　84
1.3　ジェンダー統計とは何か　86
2　ジェンダー統計の展開……89
2.1　ジェンダー統計の国際的体制　89
2.2　世帯調査と世帯主概念　90
2.3　インフォーマル労働やアンペイドワークの把握　91
3　分析ツールとしてのジェンダー統計……94
3.1　日本におけるジェンダー統計の現状と課題　94
3.2　性別欄削除の動きと SOGI の調査のあり方をめぐって　97
3.3　フェミニスト経済学とジェンダー統計　99
Column ⑤　「21 世紀の独立国」の統計調査　93

第 II 部　領域と可能性

第 6 章　労働市場――ペイドワークと格差――――――――――――104
1　労働のジェンダー格差 ……104
1.1　労働（ワーク）とは　104
1.2　労働力率の男女格差　107
1.3　インフォーマル経済とジェンダー　108
2　経済学は男女格差をどのように説明してきたのか ……111
――性別職務分離と男女間賃金格差
2.1　労働供給要因への着目　111
2.2　労働需要要因への着目　113
2.3　男女間賃金格差の経済学　116

3　フェミニスト・アプローチ ……117
——制約の構造としての世帯・企業・国家への注目
3.1　フェミニスト経済学の中間的アプローチ　117
——エージェンシーと構造
3.2　男女間賃金格差是正に向けた取り組み　119
3.3　就労とケアの調和政策　121
Column ⑥　インドと日本の縫製産業と家内労働者　110

第 7 章　マクロ経済——再生産領域を加える——124
1　マクロ経済とジェンダー ……124
1.1　マクロ経済政策とジェンダー不平等　124
1.2　GDP とは何か　126
1.3　日本経済の動向と女性　128
2　経済学はマクロ経済をどのようにとらえてきたか ……130
2.1　新古典派経済学とケインズ　130
2.2　生産活動と経済循環　131
2.3　生産と再生産　133
——フェミニスト経済学の視点からみたマクロ経済
3　ケアとマクロ経済の相互作用 ……137
3.1　メゾ段階における 3 つの男性バイアス　137
3.2　マクロ経済事象や政策がジェンダー平等に与える影響　139
3.3　フェミニスト経済学と経済成長論の再考　141
Column ⑦　ケア再配分のマクロ経済効果　138

第 8 章　ジェンダー予算——ジェンダー主流化のためのツール——144
1　私たちの生活と財政 ……144
1.1　私たちの生活と政府予算のかかわり　144
1.2　日本の国家予算　146
1.3　予算編成のプロセス　148
2　ジェンダー予算 ……148
2.1　ジェンダー予算とその必要性　148
2.2　ジェンダー予算の展開　149
2.3　ジェンダー予算の手法と分析　152
3　日本におけるジェンダー予算の取り組み ……154
3.1　政府の取り組み　154

3.2　市民社会の取り組み　156
3.3　ジェンダー予算の将来　160
Column ⑧　草の根レベルのジェンダー予算イニシアティブ　158
——イギリスにおける女性予算グループの活動

第 9 章　福祉国家——ジェンダー関係を形づくる——163
1　福祉国家とジェンダーはどのような関係にあるのか……163
1.1　福祉国家とは　163
1.2　福祉国家とジェンダー平等／不平等　165
1.3　貧困とジェンダー　168
2　資本主義経済と福祉国家……171
2.1　経済学は国家をどのようにとらえてきたか　171
2.2　福祉国家論・福祉レジーム論　173
3　福祉国家のフェミニスト分析……174
3.1　フェミニストによる福祉国家論・福祉レジーム論　174
3.2　東アジアの視点　177
3.3　ベーシックインカムとソーシャル・プロヴィジョニング　179
Column ⑨　中国の保育事情　178

第 10 章　金融——金融危機のジェンダー分析——183
1　金融資本主義の台頭とジェンダー格差……183
1.1　金 融 と は　183
1.2　現代経済における金融の台頭と課題　184
——金融危機と広がる格差
1.3　金融におけるジェンダー格差の議論　186
——女性の「金融排除」と「過少代表」
2　経済学は金融のジェンダー格差問題をどのようにとらえているのか…187
2.1　経済合理性の観点からみたジェンダー格差　187
2.2　合理的な金融市場像の落とし穴（1）　189
——金融不安定性のジェンダー不平等な帰結
2.3　合理的な金融市場像の落とし穴（2）　191
——金融包摂の「質」の問題
3　金融危機のジェンダー分析……192
——ソーシャル・プロヴィジョニング・アプローチから
3.1　金融危機のジェンダー分析の必要性　192

3.2　金融危機のジェンダー・インパクト（1）　194
——インフォーマル経済を通じた影響
3.3　金融危機のジェンダー・インパクト（2）　195
——再生産領域への影響
3.4　政策対応におけるジェンダー観点の必要性　197
Column ⑩　マイクロファイナンス（MF）の光と影　188

第 11 章　資本・労働力移動——202
——グローバル経済の特質としての女性化
1　グローバル経済と資本・労働力移動……202
1.1　グローバリゼーションとグローバル経済　202
1.2　グローバル経済における資本・労働力移動の推移　204
1.3　グローバル経済における資本・労働力移動の関連　207
——ジェンダーがもつ意味
2　資本移動とフェミニスト経済学……209
2.1　多国籍企業の出現と新国際分業　209
2.2　新国際分業と労働力の女性化　210
2.3　労働力の女性化とエンパワーメント　213
——バングラデシュの縫製産業の事例
3　労働力移動とフェミニスト経済学……215
3.1　移動がもたらす経済的効果の測定　215
3.2　ケアの危機と国際移動の女性化——再生産労働の国際分業　216
3.3　資本と労働力の国際移動と女性の人権の保障　219
Column ⑪　韓国の少子化と国際結婚　217

第 12 章　貿易自由化——競争優位の源泉としてのジェンダー格差——224
1　貿易のフェミニスト経済学とは何か……224
1.1　貿易とは何か　224
1.2　第 2 次世界大戦後の貿易体制とその特徴　227
1.3　貿易のフェミニスト経済学の形成　229
2　自由貿易の理論と自由貿易体制……231
——貿易自由化の恩恵を受けるのは誰か
2.1　比較優位の理論と不平等の解消　231
2.2　自由貿易と南北間の不平等　233
2.3　自由貿易とジェンダー不平等　235

3　貿易自由化とジェンダー平等，そしてその先へ……236
——フェミニストの挑戦
3.1　貿易自由化とジェンダー格差　236
——賃金，労働環境，就業形態，アンペイドワーク
3.2　グローバル・バリューチェーンのジェンダー分析　238
3.3　自由貿易体制とジェンダー主流化　240
Column ⑫　ジェンダーに敏感な人権デュー・ディリジェンス　239

第 13 章　開発——連帯とエンパワーメント——244
1　開発とジェンダー……244
1.1　植民地支配のジェンダー観　244
1.2　「身体の健康と安全」という開発課題　246
1.3　性と生殖にかかわる権利とウェルビーイング　250
2　開発経済学とジェンダー……251
2.1　「女性と開発」をめぐる視座の発展　251
2.2　フェミニスト経済学の問い　254
2.3　女性と人間開発——ケイパビリティ・アプローチ　256
3　ケイパビリティとエージェンシー……258
3.1　資産へのアクセスと管理の不平等　258
3.2　セックスワーカー——エージェンシーの観点から　259
3.3　HIV／エイズと女性——グローバルな連帯へ　260
Column ⑬　SEWA の保育所——草の根の実践から政策形成へ　261

第 14 章　環境・災害——レジリエンスの構築——266
1　地球環境，災害とジェンダー……266
1.1　危機に瀕する地球環境　266
1.2　環境破壊とジェンダー　268
1.3　災害とジェンダー　270
2　経済学は環境問題をどう扱ってきたのか……272
2.1　環境問題への経済学的アプローチ　272
2.2　温暖化防止のグローバル・ガバナンスと経済的手法　275
2.3　環境ケインズ主義と脱成長論　278
3　レジリエンス構築へのフェミニスト・アプローチ……279
3.1　エコロジカル・フェミニズムをめぐる議論　279
3.2　フェミニスト・エコロジカル経済学　281

3.3　ジェンダーに公正なレジリエンス構築　282
Column ⑭　大地震と女性のレジリエンス　283

読書案内　287
あとがき　292
索　引　294

あとがき

私たちが生きる社会を持続可能なものにするには，万人のベーシックニーズを満たすこと，子どもを生み育て次世代を再生産すること，環境破壊や災害などの危機に対してレジリエンスを構築することが必要である。経済学は，市場で取引されるものをおもな分析対象とし，市場で取引されないものも市場取引を仮定して分析する傾向にあった。しかし，私たちのベーシックニーズは市場での取引だけでは満たされない。私たちの生活は経済学が対象としてこなかった非市場領域であるアンペイドワークによっても支えられている。そしてアンペイドワークは，誰かの責任において担われており，自然に湧き出てくるものではなく，生態系の機能もまた無尽蔵に供給されるものではない。主流派経済学が，人間の合理的選択とその結果としての効率的な資源配分を分析する学問であることに対して，フェミニスト経済学にとっての経済学とは，人間の生存に必要なものを備え供給するプロヴィジョニングのありようを非市場領域も含めて分析することである。このように経済学の枠組みを問い直し，扱う領域に非市場領域も含めることで，ようやく私たちは市場に登場しないすべての人のことを経済学の研究対象として分析できるようになる。

このような問題意識を共有した9人の女性研究者が集い，テキスト研究会が立ち上がったが，すぐに，新型コロナウイルス感染症のパンデミックに直面した。対面で集まれなくなり，私たちの研究会も延期を余儀なくされた。そうしたなか，コロナ禍のステイホーム政策でも，生活インフラを支えるエッセンシャルワーカーと呼ばれる人々が働き続け，看護師や介護士などが担うケアが私たちの生存に直結することを痛感した。学校の一斉休校の発令にともなって世帯内のアンペイドワークの負担は増大したが，その負担の分担も男女で公平でないさまも目の当たりにした。国際フェミニスト経済学会（IAFFE）は，フェミニスト経済学がこうした状況をどのように分析し，どのような政策が必要なのかを議論する場を設け，その模様は世界中に発信され，私たちもそれに刺激を受けた。フェミニスト経済学がこうした事態にいかに必要とされているのかを実感し，オンラインでの研究会を継続することにした。

2019年12月23日に初回のテキスト研究会を開催してから，23年4月まで

合計27回の研究会をもった。初回研究会では，編者の1人である長田がロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）での在外研究中に受講したフェミニスト経済学の講義資料について報告し，講義内容を学び，日本のテキストで何をどのような構成で執筆するのかを議論した。そのうえで，フェミニスト経済学に関する重要文献を輪読し，中核となる議論を学ぶ機会を10回設けた。その後，各章の検討に加えて，全章の検討会も4回に及んだ。各章，全章の検討会では，皆で原稿にコメントを付して，執筆者に戻し，執筆者はそのコメントを踏まえて，次回の検討会に臨むという作業を繰り返した。フェミニスト経済学の議論を各自の専門分野を超えて学びながら，日本の文脈で何が重要でどのように解釈できるのか，議論しながら，本書をつくりあげた。

そしてこの間に，執筆メンバーのうち2人が出産した。ほかにも子育てや介護をするメンバーもおり，ケア時間を確保しながら執筆を行う工夫をしてきた。研究者の研究会は夜間や週末に開催されがちだが，平日17時には切り上げ，執筆メンバー間で互いに協力し，できないことは誰かがカバーするといったように，助けあいながら，刊行までたどり着いた。こうした過程を振り返れば，この本の刊行（プロダクション）はまさにリプロダクションと切り離せない。

最後に，有斐閣の担当編集者の長谷川絵里さんに感謝を伝えたい。長谷川さんは27回のすべての研究会に参加し，私たちの議論に対し，的確な助言や提案をしてくれた。4回の全章検討会には，すべての原稿にコメントを付してくれた。コメントは建設的で，核心を突くものばかりだった。原稿の提出が遅れがちな私たちに，いつも辛抱強く付きあっていただいた。心からの感謝を捧げたい。また，各執筆者がほかの研究会や個人的なつながりを通じて，多くの先輩同輩から原稿に対する助言をいただいた。お名前を1人ひとりあげることはできないが，かかわってくださったすべての方に感謝を申し上げる。

1人でも多くの読者が本書の議論に共感し，ジェンダー平等な社会づくりの一員として手を携え，フェミニスト経済学を発展させる仲間になってもらえれば，編者としてこれ以上の喜びはない。

2023年8月

編　　者

フェミニスト経済学——経済社会をジェンダーでとらえる
Introduction to Feminist Economics: The Japanese Feminist Perspective

2023 年 10 月 10 日 初版第 1 刷発行

編　者　長田華子（ながた はなこ）・金井郁（かない かおる）・古沢希代子（ふるさわ きよこ）
発行者　江草貞治
発行所　株式会社有斐閣
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17
https://www.yuhikaku.co.jp/
装　丁　堀由佳里
印　刷　株式会社理想社
製　本　大口製本印刷株式会社
装丁印刷　株式会社亨有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
©2023, H. Nagata, K. Kanai and K. Furusawa.
Printed in Japan. ISBN 978-4-641-16620-2

本書のコピー，スキャン，デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは，たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複写（コピー）は，著作権法上での例外を除き，禁じられています。複写される場合は，そのつど事前に，（一社）出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088，FAX 03-5244-5089，e-mail:info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。